

和泉観ボラだより 第14号

2016.3 発行

〒594-0071 和泉市府中町 1-19-9 (和泉府中駅前) 和泉市いずみの国観光おもてなし処気付「和泉観光ボランティアクラブ」

TEL : 0725-40-5552

FAX : 0725-40-5553

光明池の歴史と観光ポイント

光明池は大阪狭山市の狭山池や岸和田市の久米田池と比較すると景観からはるかに古い時代に造られたような雰囲気醸し出しており現在でも古代池と間違える方が多いようです。

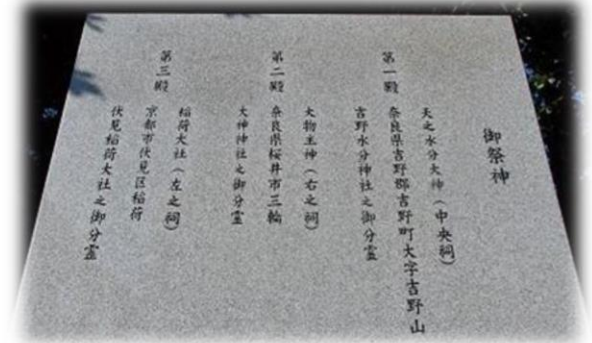
ある HP に「現在の光明池ができる前にも白鳳時代の行基が掘った『光明池』があり、池の竣工の際に光明皇后が聖武天皇とともに臨幸した。それでその池を光明池と名づけた…云々」と書かれていました。時代表現の整合性はともかく、HP 管理人にとってはそう思いたくなるほど風光明媚な時代の匂いを漂わせる素敵な池なのでしょう。

「光明池」の名前の由来はこの地域に伝わる「光明皇后伝説」から生まれたものとされますが、飛鳥奈良時代に築造された古代池である狭山池や久米田池のようなものではありません。

光明池は昭和の初期、信太山丘陵の主に北・北東地域の平野部の灌漑用水を確保する目的で造られた溜池で「昭和の大池」と表す人もいます。歴史は古くはありませんが、池築造についての歴史や苦勞談等、語り継がれるものが多く存在します。

景色を眺めながら散歩できる遊歩道が整備されています。光明池の築造当時の歴史や秘話を学びながら歴史観光のウォーキングをしてみたいかたがでしょうか？

池の周り約 5km を歩き終わった後には、いつもとは違う光明池が発見できると思います。



光明池見どころポイント

1. 主堤防 四つの石碑
 2. 光明池守護神社 3神社
 3. 甲斐田川 (除川)
 4. 光明池大橋 (あいあい橋)
 5. 落羽松の並木道 (大阪みどりの百選)
 6. 光明池窯跡群の碑
 7. 光明池流入り口=取水口 (溝)
 8. 市民の森
(光明池緑地整備完成フェア植樹林・野外)
 9. コミュニティ体育館
(緑地公園グラウンド・テニスコート)
 10. 和田の共同墓地頂上 (朝鮮労働者の埋葬地)
 11. 光明池管理事務所
 12. 副堤防 (光明皇后と女鹿の碑)
 13. 取水塔
 14. 取水トンネル
 15. 光明池朝鮮労働者の慰霊碑
 16. 古い樋門
- それぞれのポイントを歩いて、所縁を調べてみてはいかがでしょうか。



わたしの好きな和泉市のスポットは…

松尾寺は、やまもも、桜、紅葉など季節によって訪ねる楽しみと発見がありますが、新緑の頃の「青もみじ」がおすすめです。ここ十数年、秋の「紅葉狩り」に対比するかのよう新緑の楓を「青もみじ」という言葉で表現するのを耳にするようになりました。和泉中央駅から桃山学院大学キャンパスを新緑を満喫しながら通り抜け、「いずみの国歴史館」で和泉市の歴史を辿り、松尾寺へと初夏の歩きやすい時期に訪ねてみませんか？松尾寺のバス停近くには樹齢700年と言われている大阪府指定天然記念物「松尾寺のくす（クスノキ）」があります。1月1日～3日 修正会、2月 節分会、4月第1日曜日 御影供（大法要）（さくらまつり・採灯大護摩供）、11月（旧10月15日）松尾明神供などに、たくさんの人で賑わいます。季節によって無人販売所で「たけのこの水煮」「みかん」など売っているのをみかけることもありました。和泉は「みかん」の産地でもあります。



和泉シティプラザの風景

和泉シティプラザに山口晃さんの作品が飾られています。大和絵や浮世絵のようなタッチの画風で知られ、2011年に岡本太郎記念現代芸術大賞優秀賞を受賞されています。書籍の装丁や広告、成田空港のロビーなどにパブリックアートとして作品が設置されている画家で、2012年には平等院の養林庵書院に襖絵が奉納されました。和泉シティプラザの茶室を利用しないと観ることができないのが残念です。観光スポットとしてPRして、全国の山口晃ファンの人にも観て戴きたいと思います。全国各地で開催される個展では根強いファンが訪れています。



松尾寺



葛葉稲荷神社



聖神社



施福寺



久保惣美術館



また、和泉シティプラザの館内・敷地内には数々のモニュメント、絵画、版画などがあります。ひとつひとつをぜひ探してみたいかがでしょうか？意外な観光スポットなのかもしれません。



成田空港国際線ロビーにある山口晃さんの作品

春の花が咲いています♪



和泉市内には桜の名所がたくさんあります。3月末～4月上旬頃に関西版（新聞や旅行・観光関係のWebサイト等）の桜開花情報に黒鳥山公園など掲載されているのを見かけます。それより一足先の2月下旬に、春爛漫の華やかな桜にくらべ香りは高いけれど慎ましやかに咲く梅の花が、「和泉リサイクル環境公園（納花町）」で満開を迎えました。

梅と時期を同じくして、水仙の花が咲いています。これから暖かくなっていき、夏にかけてチューリップ、芝桜、ラベンダーの花々が順を追って咲いていきます。新緑の季節がそこまで来ています。花を求めて歩いてみませんか？



和泉観光ボランティアクラブ活動日誌 （北信太界隈の歴史を辿る研修）

2月11日「北信太駅～小栗街道の聖神社鳥居～信太山駅」現地研修を実施しました。

駅から徒歩3分のところに和泉の国の霊泉があります（天女が羽衣を清めたとされる「尾井の清水」）、現在は周辺の開発で水脈がたたれ残念です。

府道30号を横切り、小栗街道寄りの「尾井の宮さん」と親しまれている舊府（旧府）神社を参拝しました。拝殿に「氏神牛頭天皇」の棟札があり、防疫の神様と信仰があったことが偲ばれました。ここでは葛の葉伝説で獵師に追われた白狐が石に化けて難を逃れたとされる「化け石」も見逃すことができません。

小栗街道を南下すると、「トリゲ」と発音される聖神社の一の鳥居が見え、扁額がないのに気がつきます。

後白河上皇が熊野御幸の無事を祈願し「正一位信太聖大明神宮」の扁額を奉納しました。しかし高石の漁師から「扁額がキラキラ光り魚が獲れない」という苦情で扁額を本殿奥にしまい込んだと言われています。

一の鳥居から坂を上りきると、二の鳥居があります。ここに砂岩で作られた狛犬がありますが今にも崩れそうで、何とか現状保存が望まれます。

高師の浜から二の鳥居にかけては「布引の道」と呼ばれ、聖の神がお渡りになったさまが目に浮かぶ眺望です。

小栗街道沿いの八坂神社前に「高札場跡」があります。高札とは、掟・条目・禁制などを書いて掲げたもので、現代の掲示板と思われ、旅人の往来で賑わった証です。向かいの照手姫の腰掛石や笠掛松は地元の方により守られています。小栗判官と照手姫への愛着が深いことを感じました。

「小栗判官譚」は、波瀾万丈のラブロマンスとして描写され演じられていますが、背後には当時の社会の最下層に置かれた民衆の苦しみ悲しみが存在しているといえます。当時の人々にとって、熊野は希望の光輝く憧れの地であったのではないかと研修を通じて思いをはせました。



観光ガイドへのお問い合わせ先「和泉市いずみの国観光おもてなし処」

開所時間・10:00～18:00 定休日・月曜日（祝日の場合は翌日）年末年始

TEL：0725-40-5552

FAX：0725-40-5553

和泉観光ボランティア出前講座報告

2月14日、南部リージョンセンターで「施福寺ってどなたどこ」で始まった講座。氷河時代の厳しい自然環境の高地「横山」に人類初の足跡を残したのが「横山人」と言われています。

何世紀にもわたる長い年月が経過し、欽明天皇の発願で行満上人が建立したと伝わっている施福寺のルーツ「茅渟の山寺」が生まれました。

山林修行を始めた「優婆塞（うばそく）」と呼ばれた人たちと横山の村人たちは交流を深め、信仰は生活に融け込み、師弟関係も生まれたという話もあるそうです。

施福寺と村人がともに歩んだ歴史の流れを振り返って話をさせていただきました。「空海」との縁がある施福寺は西国三十三観音霊場が開かれて勧進に加えて参詣による財政基盤ができました。「覚超」を生み出した土豪・池辺氏は開発した耕地をそっくりそのまま施福寺（槇尾寺）に寄進したと伝えられています。

やがて寺院は織田信長によって焼き討ちされ、太閤検地で荘園制度はなくなってしまいました。村と寺が、生きていくための山の用益に係る山論の対立は16年の歳月を経て収まりました。

明治維新という激変革期に、寺領の「上地と、その下げ渡し」があり、資金に困窮した施福寺に、村人が支援の手を差し伸べて着したのです。小競り合いはありましたが「茅渟の山寺」で生まれた仏の縁で培った調和と共生の文化は生きていたのです。

和泉観光ボランティアクラブ劇団(?)
回を重ねるにつれて余裕も生まれてきたかも?
演目は「貧女の一灯」です。



和泉観光ボランティアクラブ劇団(?)の寸劇も回を重ねるにつれて、みなさんの前に立つのも慣れてきました。新作が披露できるよう、和泉市の歴史や言い伝えなどしっかりと学び、これからに繋げていきたいと思えます。

ガイド依頼があったとき、出前講座に招かれたとき、和泉観光ボランティアクラブのメンバーは、事前に打ち合わせ、勉強、練習をします。

みなさんによりよい「おもてなし」と、情報提供ができるよう日々精進して活動しています。練習風景を少しでもお見せいたします。和気藹藹だけれど一所懸命なメンバーです。



みんなであつまって、練習中…
笑顔とたのしい語らいがある風景です。



引き続き、西国三十三ヶ所第四番札所「槇尾山施福寺」について話しました

今回の講座に使われていたチラシの薄紫色は、大門あたりに群生しているシャガの花の色です。シャガは4月～5月頃にかけての新緑の季節に大門あたりに群生している花です。

参道途中の溪谷中程に大岩が割れた真ん中に大きな楓の木があります。「卵が先か、鶏が先か」のように「楓が先か、城郭跡の石垣が先か」と考える人もいるのかもしれませんが。

歴史の変遷の中、何度も焼失した寺坊跡が多数あり、札所の中では一番の難所といわれるので、それだけにご利益があると思われれます。「1000回はお参りしています。」という参加者から声がありました。地元の人に、親しまれている険しいけれど身近な山寺なのだ実感しました。

参加されたみなさんは、しっかりと耳を傾けてお聴きになり、メモを取られていました。